二字漢字語の音訓読み分けについて

武部良明

一　考察の対象

一般に漢字というのは意味を持っていて、その意味はそれぞれの漢字に固有のものである。その点では、それぞれの漢字そのものに意味が結びついているから、二字漢字語の場合もその意味は、その読み方とは関係なく、個々の漢字の意味を基にして理解することが可能である。「左側」という二字漢字語についていえば、「左」をヒダリ、「側」をカワと理解することによって、「ヒダリのカワ」という理解につながるからである。その際に、「左側」という漢字語を字訓で「ひだりがわ」と読んでも、字音で「さそく」と読んでも、その表す基本的な意味に変わりがないわけである。しかし、常にそのように考えてよいかといえば、そうとは限らないというのが実情である。

それでは、どういう場合にその例外が見られるかということであるが、例えば、「実物」という二字漢字語がこれである。これを字訓で「みもの」と読むときと字音で「じつぶつ」と読むときでは、その意味が異なるからである。字訓で「みもの」と読むときには、「葉物・はもの」「花物・はなもの」と同じ扱いで、「ミを主とするモノ・ミのモノ」という意味になる。これに対して字音で「じつぶつ」と読むときは、「模型・もけい」「見本・みほん」に対する扱いで、「ホンモノ・ホントウのモノ」という意味になる。その点では、「実物」という二字漢字語の意味に二つあり、その意味の違いが、字訓で読むか字音で読むかという読み方の違いにつながるわけである。ここでいう「音訓読み分け」というのは、例えば、この「実物」の「みもの・じつぶつ」のような場合のことである。

二　音訓読み分けの実情

音訓読み分けになる「実物」の「みもの」と「じつぶつ」であるが、このような読み分けの前提として考えられるのは、それぞれの漢字の意味が必ずしも一つではないということである。そのことを「実物」の場合でいえば、「物」のほうは「もの」と読ん

でも「ぶつ」と読んでも同じモノの意味を表している。これに対して、前半の「実」のほうは、事情が異なっている。それは、「実」という漢字に「植物のミ」の意味と「ホントウ」の意味と二つあるということである。しかも、その二つの意味のうち、一方が字訓で「み」と読むことにつながり、一方が字音で「じつ」と読むことにつながるということである。

このように、前半の漢字が二つの意味を持っていて、それが読み分けにつながる二字漢字語としては、「実物」だけが特例ではない。例えば、次のような場合も、同じ関係にあると考えてよいのである。

○頭数（あたまかず・人間の数）（とうすう・動物の数）
○上水（うわみず・表面の水）（じょうすい・飲料用の水）
○角柱（かどばしら・隅の柱）（かくちゅう・四角の柱）
○金山（かなやま・金属の鉱山）（きんざん・金鉱の鉱山）
○米船（こめぶね・コメの船）（べいせん・アメリカの船）
○生魚（なまざかな・未調理の魚）（せいぎょ・新鮮な魚）

このように見てくると、例えば、「国境」を「くにざかい・こっきょう」と読み分けるのも、同じように考えることができる。一般には「国」の意味がクニだとされているが、字訓で「くにざかい」と読むときの「国」の意味が近世までの行政区画としてのクニを表すのに対し、字音で「こっきょう」と読むときの「国」は、現代の統治権を主とするコッカを表すわけである。「山主」の「やまぬし・さんしゅ」、「白酒」の「しろざけ・はくしゅ」なども、ヤマ・シロイの意味が、さらに「ヤマそのもの・ヤマにあるテラ」「色がシロイ・濁ってシロイ」の二つに分かれるからなのである。

以上は二字漢字語の前半に見られる意味の異同であるが、後半について異同の見られる場合もいろいろある。例えば、「粉炭」というのがこれである。これを字訓で「こなずみ」と読めば「コナのスミ」であり、字音で「ふんたん」と読めば「コナのセキタン」だからである。この場合の「粉」のほうは、前記「実物」の「物」と同じように、音訓共にコナの意味を表している。このように、後半のほうの漢字が二つの意味を持っていて、それが音訓の読み分けにつながる二字漢字語としては、例えば、次のような語の場合がこれである。

○内面（うちづら・内のカオ）（ないめん・内のヨウス）
○小刀（こがたな・小ハモノ）（しょうとう・小カタナ）
○小額（こびたい・小ヒタイ）（しょうがく・小キンガク）
○舌音（したおと・舌のオト）（ぜつおん・舌のオン）
○初日（はつひ・初のタイヨウ）（しょにち・初のヒ）
○氷室（ひむろ・氷のアナ）（ひょうしつ・氷のヘヤ）

このように見てくると、「風車」を「かざぐるま・ふうしゃ」と読み分けるのも、同じように考えることができる。一般には「車」の意味がクルマだとされているが、字訓で「かざぐるま」と読むときには「風で動く普通のクルマ」であるのに対し、字音で「ふうしゃ」と読むときは「風で動く装置としてのクルマ」を表すわけである。「外壁」の「そとかべ・がいへき」や「草原」の「くさはら・そうげん」なども、カベ・ハラの意味が、さらに「ヌリカベ・カコイ」「ノハラ・アレチ」の二つに分かれるからである。

このように見てくると、音訓の読み分けには、「実物」のように前半の漢字の意味が異なる場合と、「粉炭」のように後半の漢字の意味が異なる場合とのあることが分かる。それならば、前半も後半も共に意味の異なる場合はどうかというと、例えば、「細目」がこれである。これを字訓で「ほそめ」と読むと、「ホソイ・メ」のことである。それに対して字音で「さいもく」と読むと、「コマカイ・クワケ」のことである。そのようになる理由は、「細」に「ホソイ・コマカイ」の二つの意味があり、「目」に「メ・クワケ」の二つの意味があり、それぞれの意味の組み合わせが、字訓読み・字音読みにつながるからである。このように前半の漢字も後半の漢字もそれぞれが二つの意味を持っていて、それが音訓の読み分けにつながる二字漢字語としては、例えば、次のような場合が見られるのである。

○外車（そとぐるま・外側の車）（がいしゃ・外国の自動車）
○火口（ひぐち・灯火の入り口）（かこう・マグマの出口）
○長身（ながみ・ナガイ本体）（ちょうしん・セダカイ身体）
○人足（ひとあし・ヒトの往来）（にんそく・肉体の労働者）
○水心（みずごころ・水のキモチ）（すいしん・水面の中心）
○目下（めした・自分のメのシタ）（もっか・当面のバメン）

このように見てくると、例えば、「明々」の「あかあか・めいめい」のような繰り返しの場合も、同じように考えることができる。それは、「明」というのが「アカルイ・アキラカ」という二つの意味を持っていて、それぞれの意味を持つ場合が、音訓の読み分けにつながるからである。「早々」の「はやばや・そうそう」や「深々」の「ふかぶか・しんしん」なども、「早」の「ハヤイ・イソグ」、「深」の「フカイ・フケル」という意味の違いによるわけである。

三　部分的な読み分け

以上が音訓読み分けの実情であるが、これらの場合の「実物」や「粉炭」においては、「物」や「粉」が同じ意味を持つことになる。したがって、読み分けの重点は「実」や「炭」であり、この部分に音訓の読み分けが見られるだけでもよいことになる。例えば、「細字（ほそじ・さいじ）・上物（うわもの・じょうもの）」や「半月（はんつき・はんげつ）・旅人（たびびと・たびにん）」などの場合がこれである。

まず、「細字」「上物」のほうから取り上げることにする。この場合は、「字」や「物」の意味が同じである。これに対して、「細」や「上」の持つ二つの意味「ホソイ・コマカイ」「ウエ・ヨイ」が、字訓「ほそ」と字音「さい」、あるいは、字訓「うえ」と字音「じょう」に読み分けられている。次のような場合も、このように、読み分けの部分が意味の違いにつながるのである。

○牛屋（うしや・ウシの業者）（ぎゅうや・牛肉料理の業者）
○角材（かどざい・隅の材木）（かくざい・四角の材木）
○金印（かないん・金属のハン）（きんいん・キンのハン）
○下図（したず・下書きの図面）（かず・下方の図面）
○一役（ひとやく・ヒトツの役目）（いちやく・重要な役目）
○古本（ふるほん・新品でない本）（こほん・年代の古い本）

これらの場合は、前半の意味の違いが音訓の読み分けにつながるわけである。

なお、こういうのを集めてみると、中には「山気」の「やまき・さんき」のような場合もある。「やまき」は「ヤマそのものを当てるキ（気持ち）」で「投機心」の意味になるが、「さんき」は「ヤマに満ちているキ（空気）」である。その点では、「山」の意味の違いが「やま・さん」と読み分けられているのに対して、「気」のほうは、「気持ち・空気」を超えて同じ「き」と読まれている。このように、他方が同じ読みでありながらも意味の異なるものには、次のような語がある。

○新手（あらて・まだの軍勢）（しんて・新しい手段）
○新湯（あらゆ・まだのフロ）（しんゆ・新しい温泉）
○上米（うわまい・ウエの部分）（じょうまい・上等のコメ）
○仮免（かりめん・臨時の免許証）（かめん・一時の釈放）
○中細（なかぼそ・途中の凹体）（ちゅうぼそ・中位の細さ）
○名代（なだい・名の評判）（みょうだい・主の代わりの者）

これらの場合は、前半の意味の違いが音訓の読み分けにつながるとともに、後半も意味の違いを持つことになるが、このほうは同じ読みのままである。

次に、「半月・旅人」のほうを取り上げることにする。この場合は、「半」や「旅」の意味が同じである。それに対して、「月」や「人」の持つ二つの意味「ツキヒのツキ・ソラのツキ」「フツウのヒト・ヤシのヒト」が、字訓「つき」と字音「げつ」、あるいは字訓「ひと」と字音「にん」によって読み分けられている。次のような場合も、このように、読み分けの部分が意味の違いにつながるのである。

○地雷（じがみなり・地の鳴動）（じらい・地の爆雷）
○仕業（しわざ・行う行為）（しぎょう・行う作業）
○新山（しんやま・新しい鉱山）（しんざん・新しい火山）
○天日（てんぴ・テンの日光）（てんじつ・テンの太陽）
○半生（はんなま・半分のナマ）（はんせい・半分の生涯）
○見様（みざま・目で見るカタチ）（みよう・目で見る方法）

これらの場合は、後半の意味の違いが音訓の読み分けにつながるわけである。

なお、こういうのを集めてみると、中には前記「山気（やまき・さんき）」とは逆に、後半が読み分けられているのに対して、前半の意味の違いが読み分けられていない場合もある。「金星」の「きんぼし・きんせい」がこれである。「きんぼし」は「相撲で力士が横綱を倒して得た勝ちジルシ・大手柄のシルシ」のことである。これに対して「きんせい」は、「五行の『金』をもって名づけたホシそのもの・キンのホシ」のことである。このように前半が同じ読みでありながらもその部分の意味も異なる語には、次のようなものがある。

○足代（あししろ・アシの場所）（あしだい・移動の費用）
○裏金（うらがね・背後のカネ）（うらきん・ウラの金ばく）
○座主（ざぬし・一座の持ち主）（ざしゅ・一寺の最高僧）
○実事（じつごと・写実的な演技）（じつじ・実際の事柄）
○地面（じづら・下地のヨウス）（じめん・土地の表面）

○利金（りがね・利息の金銭）（りきん・利益の金額）

これらの場合は、後半の意味の違いが音訓の読み分けにつながるとともに、前半も意味の違いを持つことになるが、このほうは同じ読みのままである。

ところで、中には前半または後半だけでなく、二字漢字語の前後が共に同じ読みを持ちながら、それぞれが異なる意味を持つ場合も見られるわけである。例えば、「上流」「人手」を「じょうりゅう」「ひとで」と読む場合がこれである。「上流」には「川の上流・カミのナガレ」と「階級の上流・ウエの階層」と二つあるが、これは、「上」が「カミ・ウエ」、「流」が「ナガレ・階層」の意味を持つからである。また、「人手」には「人手を加える・ヒトの作業」と「人手に渡る・タニンの所有」と二つあるが、これは、「人」が「ヒト・他人」、「手」が「作業・所有」の意味を持つからである。しかし、こういうのは、同じ読みの語「上流・じょうりゅう」「人手・ひとで」にそれぞれ二つの意味が見られる場合であり、ここで取り上げてきた「音訓読み分け」とは異質のものである。

四　意味の係り方の異同

次に、見方を変えて、二字漢字語の読み分けを、漢字相互の意味の係り方という観点から取り上げることにする。実を言うと、前節までに取り上げてきたのは、すべて前の漢字の意味が後の漢字の意味を修飾する形のものであった。このことは、「左側」や「実物・粉炭・細目」の場合だけでなく、「細字・上物」「半月・旅人」の場合にも言えることである。ここでは、こういう係り方を「修飾型」と呼ぶことにする。すべての例語をこのような修飾型に限ってきたのは、音訓の読み分けをする二字漢字語において、この形のものが圧倒的に多いからである。しかし、実際には、修飾型以外の係り方をするものも、いろいろと見られるわけである。例えば、「縦横」の場合がこれである。字訓で「たてよこ」と読むのと字音で「じゅうおう」と読むのとでは、「左側」の場合と同じように、その基本的な意味に変わりがない。しかし、漢字の意味の係り方という点では、両者は全く異なっている。「左側」のほうが修飾の関係なのに対し「縦横」のほうが対等の関係だからである。こういう意味の係り方を、「修飾型」に対して、「対等型」と呼ぶことにする。対等型には、「縦横」のように全く反対の意味の組み合せのほかに、「年月」のように並列する意味のものもある。ただし、音訓読み分けの立場ではこの二つを区別する必要がないので、共に「対等型」に含めて扱うことにする。

ところで、「縦横」も「年月」も、「左側」の場合と同じように、字訓読みの「たてよこ・としつき」も字音読みの「じゅうおう・ねんげつ」も、基本的な意味に変わりがない場合である。しかし、中には、「車馬」のように、字訓読みと字音読みで、その係り方の異なる場合も見られるわけである。これを字訓で「くるまうま」と読めば、「クルマのウマ」であって、修飾型になる。これに対して字音読み「しゃば」のほうは、「クルマとウマ」であって、対等型になる。このように、意味の係り方の違いが音訓

の読み分けにつながる場合があることは、次の例に見るとおりである。

○氏名（うじな・ウジのナ）（しめい・ウジとナ）
○歌舞（うたまい・ウタのマイ）（かぶ・ウタとマイ）
○風雲（かざぐも・カゼのクモ）（ふうう・カゼとクモ）
○筋骨（すじぼね・スジのホネ）（きんこつ・スジとホネ）
○火煙（ひけむり・ヒのケムリ）（かえん・ヒとケムリ）
○山水（やまみず・ヤマのミズ）（さんすい・ヤマとミズ）

言うまでもないことであるが、字訓読みのほうが修飾型であるのに対し、字音読みのほうが対等型である。

さらに、細かく考察すると、同じ修飾型にも二つの係り方のあることが分かる。それは、「左側」のように、単純に「〜の〜」となる場合のほかに、「草色（くさいろ・そうしょく）」のように、「〜のような〜」という比況の形になるものが見られるからである。「左側」が単純な「ヒダリのカワ」なのに対し、「草色」は比況を込めた「クサのようなイロ」である。そうして、同じ修飾型に見られるこのような係り方の異同を取り上げると、中には、「水色」のように、字訓読みと字音読みで、その係り方の異なるものがある。これを字訓で「みずいろ」と読めば「ミズのようなイロ」になるのに対し、字音で「すいしょく」と読めば「ミズのイロ」そのものだからである。次のような語の場合も、事情は同じである。

○馬面（うまづら・馬のようなカオ）（ばめん・馬のカオ）
○鏡板（かがみいた・鏡のような板）（きょうばん・鏡の板）
○雷声（かみなりごえ・雷のような声）（らいせい・雷の声）
○卵形（たまごがた・卵のような形）（らんけい・卵の形）
○仏心（ほとけごころ・仏のような心）（ぶっしん・仏の心）
○柳色（やなぎいろ・柳のような色）（りゅうしょく・柳の色）

これらは、共に修飾型でありながら、字訓読みのほうが比況の意味を持つ点において、字音読みと異なるわけである。

また、字訓読みが比況の意味を持ちながら、字音読みのほうが対等型のものも見られるのである。例えば、「牛馬」の場合がこれである。これを字訓で「うしうま」と読むと馬の一種になるが、それは「ウシのようなウマ」という名づけ方である。これに対して、字音読みの「ぎゅうば」は、「ウシとウマ」のことである。次のような語の場合も、事情は同じである。

○雨雪（あまゆき・雨のような雪）（うせつ・雨と雪）
○男女（おとこおんな・男のような女）（だんじょ・男と女）
○雲煙（くもけむり・雲のような煙）（うんえん・雲と煙）
○左右（ひだりみぎ・左のような右）（さゆう・左と右）
○水墨（みずずみ・水のような墨）（すいぼく・水と墨）
○水土（みずっち・水のような土）（すいど・水と土）

これらのうち、「左右」については注釈を要するかもしれない。対等型の字訓としては「みぎひだり」だからである。それに対して「ひだりみぎ」を用いることがあるのは、左と右を入れ違えたときの言い方である。これを特にここの例に示したのは、「ヒダリのようなミギ」と解釈できるからである。

最後に、該当例は多くないとしても、「見物」のような形のも

のにも触れておかなければならない。これを字訓で「みもの」と読むと「ミル価値のあるモノ・ミルモノ」であるのに対して、字音で「けんぶつ」と読むと「モノをミル」意味だからである。つまり、字訓読みが修飾型なのに対して、字音読みが叙述型ともいうべき係り方である。次のような場合も、よく考えてみると、これと同じ関係である。

○赤面（あかづら・赤いカオ）（せきめん・カオを赤める）
○上棟（うわむね・上のムネ）（じょうとう・ムネを上げる）
○出場（でば・出るバショ）（しゅつじょう・バショに出る）
○出店（でみせ・出たミセ）（しゅってん・ミセを出す）
○指名（ゆびな・指のナ）（しめい・ナを指す）
○弱音（よわね・弱い音）（じゃくおん・音を弱める）

これらの中には、「出頭」のように、意味の係り方だけでなく、それぞれの漢字の意味までも異なる場合がある。「出頭」を字訓で「でがしら」と読むと「出たカシラ」には違いないが、その意味は「出た瞬間」である。これに対して字音の「しゅっとう」のほうは「カシラを出す」であるが、その意味は「本人の体を出す」ことになる。「頭」というのが、本来の意味から離れて、「その瞬間」の意味になったり、「本人の体」の意味になったりするからである。

五　日常語との対応

以上で、二字漢字語における音訓読み分けの実情が一応は明らかになったかと思う。ところで、問題はどのようなときに字訓で読み、どのようなときに字音で読むかということであるが、これについては簡単な法則を導き出すことができそうにもない。それぞれの漢字語の読み分けは、それぞれについて決まっているからである。しかし、全く個々別々かというと、そうとは言い切れない面も見られることになる。その点で一つの指針になるのが、例えば「左側」の読み方である。

最初に触れたとおり、これを字訓で「ひだりがわ」と読んでも、字音で「さそく」と読んでも、その表す基本的な意味に変わりがないわけである。しかし、実際問題として全く変わりがないかというと、そうではない。それぞれの場合の基本的な意味は同じだとしても、それぞれの場合の語感という立場で考えると、必ずしも同じではないからである。字訓読み「ひだりがわ」のほうが親しみのある日常語であるのに対し、字音読み「さそく」のほうが、日常生活から離れた書きことばであり、改まった語という印象を受けることになる。他の語と組み合わさった形も、「ひだりがわ（左側）を歩く」に対して、「さそく（左側）通行を厳守する」のようになる。特に法令や公用文では、「ひだりがわ」でなく、「さそく」のほうが用いられている。その点では、基本的な意味に変わりがなくても、ことばとして音声化する場合には、やはり読み分けが問題になるのである。このような観点からもっと分かりやすい例を引くと、次のようになる。

○石灰（いしばい・イシのハイ）（せっかい・同上）
○居所（いどころ・イルトコロ）（きょしょ・同上）
○塩魚（しおざかな・シオのサカナ）（えんぎょ・同上）

○船主（ふなぬし・フネのヌシ）（せんしゅ・同上）
○一棟（ひとむね・ヒトツのムネ）（いっとう・同上）
○古米（ふるごめ・フルイコメ）（こまい・同上）

こういう場合の字訓読みは日常語であり、字音読みのほうが非日常語である。

このように見てくると、考え合わされるのが学術用語の場合である。気象用語の「雷雲・海風」も、「かみなりぐも・うみかぜ」でなく、「らいうん・かいふう」と読まれている。農業用語としての「基肥・水肥・春肥・秋肥」も、「もとごえ・みずごえ・はるごえ・あきごえ」ではなく、「きひ・すいひ・しゅんぴ・しゅうひ」である。このような中でも特に著しいのが医学用語で、「左足・左腹」も、「ひだりあし・ひだりばら」ではなく、「さそく・さふく」だからである。次のような語も、日常語との間に字訓・字音の読み分けが見られる場合である。

○足骨（あしぼね・アシのホネ）（そっこつ・同上）
○小指（こゆび・チイサイユビ）（しょうし・同上）
○血眼（ちまなこ・チのマナコ）（けつがん・同上）
○鼻柱（はなばしら・ハナのハシラ）（びちゅう・同上）
○腹痛（はらいた・ハラのイタミ）（ふくつう・同上）
○前歯（まえば・マエのハ）（ぜんし・同上）

用いる薬についていえば、「水薬・粉薬・生薬」の場合も同じである。日常語の「みずぐすり・こなぐすり・きぐすり」が、「すいやく・ふんやく・しょうやく」である。

ところで、もう一度「左側」に戻ると、これを「さそく」と字音読みにするのは、文語体の伝統を受け継いだものである。そういう点から考えると、次のような語が書きことばとして字音読みを用いる理由も、納得できるわけである。

○濃緑（こみどり・コイミドリ）（のうりょく・同上）
○球形（たまがた・タマのカタチ）（きゅうけい・同上）
○波頭（なみがしら・ナミのカシラ）（はとう・同上）
○初春（はつはる・ハジメのハル）（しょしゅん・同上）
○水際（みずぎわ・ミズのキワ）（すいさい・同上）
○悪口（わるくち・ワルクイウコトバ）（あっこう・同上）

こうして、「薄氷を踏む・水泡に帰す」は、「うすごおり・みずあわ」のほうではなく、「はくひょう・すいほう」になる。「大海の一滴」も、「おおうみノひとしずく」ではなく、「たいかいノいってき」である。

このように、二字漢字語に字音読みを用いる傾向については、それなりの経緯が考えられるわけである。それは、漢文の訓読において、二字漢字語を、原則として、字音読みにしてきたからである。その点は、漢詩によく出てくる次のような語を引くまでもなく、明らかなことである。

○秋風（あきかぜ・アキのカゼ）（しゅうふう・同上）
○雨脚（あまあし・アメのアシ）（うきゃく・同上）
○空城（からじろ・カラのシロ）（くうじょう・同上）
○霜夜（しもよ・シモのヨル）（そうや・同上）
○白露（しらつゆ・シロイツユ）（はくろ・同上）
○月夜（つきよ・ツキのヨル）（げつや・同上）

このような漢文訓読の伝統が文語文に引き継がれ、それが法令・公用文や学術用語に引き継がれたわけである。二字漢字語の字音読みが非日常語の傾向を持つのも、当然のことである。

六　説明読みの場合

基本的な意味に変わりのない二字漢字語において、字訓読みと字音読みとの間に見られる語感の異同は、以上のとおりである。その場合、耳で聞いて理解する立場からいうと、字訓読みのほうが理解しやすいことになる。「左側」の場合でいえば、「さそく」よりも「ひだりがわ」のほうが、理解しやすいことになる。こういう一般的な傾向を踏まえて行われているのが、「左〜」の形を持つ次のような二字漢字語に見られる説明読みである。それは普通の読み方が「さ〜」であるにもかかわらず、特に「ひだり〜」という読み方が行われるからである。

○左京　○左極　○左軍　○左系　○左券　○左座
○左室　○左隊　○左党　○左脳　○左派　○左翼

例えば、「左京」の場合に、「さきょう」の代わりに、特に「ひだりきょう」と読んで音声化することが、説明を加えたのと同じ効果を持つのである。

このような説明読みは、決して正式な読み方ではないが、機に応じて行われている読み方である。そうして、これもまた、二字漢字語の音訓読み分けの一つとして見逃せないものである。この読み方が、「左・右」のような識別を要する場合だけでなく、広く耳で聞いて理解しにくい二字漢字語において行われているからである。例えば、次のような場合の字訓読みがこれである。

○帯状（おびじょう←たいじょう・長く狭く続く状態）
○鏡台（かがみだい←きょうだい・鏡のついた家具）
○上座（かみざ←じょうざ・目上用の上位の席）
○唐風（からふう←とうふう・中国風の様式）
○車賃（くるまちん←しゃちん・乗り物の運賃）
○筆順（ふでじゅん←ひつじゅん・文字を書き進める順序）

このような字訓を用いての説明読みが、また、「私立・わたくしりつ」「市立・いちりつ」などの同音異義語の読み分けにも用いられている。次のような字訓読みも、他方に紛らわしい同音異義語があるための説明読みである。

○型式（かたしき←けいしき）……形式（けいしき）
○刀工（かたなこう←とうこう）……陶工（とうこう）
○仮葬（かりそう←かそう）……火葬（かそう）
○酒類（さけるい←しゅるい）……種類（しゅるい）
○底本（そこほん←ていほん）……定本（ていほん）
○生肉（なまにく←せいにく）……精肉（せいにく）

このような説明読みは、正しい読み方ではないとしても、音訓読み分けの立場で、無視できない読み方の一つである。これらの中には、読みぐせとして定着しているために、すでに国語辞典の見出し語になっているものも見られるくらいである。

以上は、二字漢字語の前半に見られる説明読みであるが、次のようなものは、後半に見られる例である。

○漁場（ぎょば←ぎょじょう・漁業権のある場所）

○地米（じごめ←じまい・その土地で取れたコメ）
○朱筆（しゅふで←しゅひつ・朱で書き入れる文字）
○鉄山（てつやま←てつざん・鉄鉱石の鉱山）
○半金（はんがね←はんきん・全体の半分の金額）
○利札（りふだ←りさつ・利子支払い用の紙片）

同音異義語の読み分けのほうも、次の例に見るとおりである。

○銀糸（ぎんいと←ぎんし）……銀紙（ぎんがみ←ぎんし）
○大喪（たいも←たいそう）……大葬（たいそう）
○鉄扇（てつおうぎ←てっせん）……鉄線（てっせん）
○銅色（どういろ←どうしょく）……同色（どうしょく）
○版面（はんづら←はんめん）……半面（はんめん）
○来秋（らいあき←らいしゅう）……来週（らいしゅう）

説明読みに字訓が用いられる理由は、聞く立場で、字音よりも字訓のほうが理解しやすいからである。そうして、このことは、日常語としては、字音読みよりも字訓読みが好まれていることと無関係ではないのである。

七　結　語

一般に個々の漢字語の読み方は、それぞれの語に結びついているのであり、全く個別的なものである。しかし、前の節で取り上げたように、聞き手に理解しやすくするために、本来の字音読みの一部をわざわざ字訓読みに変えること（説明読み）も行われている。また、その前の節で取り上げたように、同じ「左側」でも、字訓読み「ひだりがわ」は日常語であり、字音読み「さそく」は非日常語である。このような実情から導き出せることは、字訓読みのほうが話しことば的であり、字音読みのほうが書きことば的だということである。そうして、このような考え方が、意味を異にする音訓読み分けにも適用できるのではないか、ということである。

まず、分かりやすいように、「細目」の場合から取り上げることにする。これを字訓で読む「ほそめ」と、字音で読む「さいもく」と、どちらが話しことば的な語かといえば、字訓読み「ほそめ」のほうである。このような観点から、そこに例示した「外車・火口・長身・人足・水心・目下」を見直すと、字訓読みのほうが話しことば的な語である。同じことは、「実物・粉炭」についても言える。そこに例示した「頭数・上水・角柱・金山・米船・生魚」や「内面・小刀・小額・舌音・初日・氷室」の場合も、字訓読みのほうが話しことば的な語なのである。

一般に、教育の立場では、二字漢字語の理解においても、それぞれの漢字の持つ意味が重視されている。しかし、読み方との関連についても根拠になるものがあれば、それに越したことはない。そういう場合に、ここで取り上げた音訓読み分けの観点が、何かと役に立つことを期待するものである。